

ラッパ道

大阪大学大学院工学研究科
機械工学専攻 准教授

大 川 富 雄

筆者は小学校よりトランペット（通称ラッパ）を始め、一応今でも吹いているので演奏歴は30年を超える。この経験を生かしてラッパ道を述べる。なお、どの楽器でも、その演奏技術はほとんど天賦の才によるので、演奏歴との間に単純な比例関係が成立しないことは言うまでもない。

ラッパ吹きは試行錯誤する。管楽器は腹式呼吸、腹筋が強くなければという強引な理論の下、小中学校では腹筋運動とランニングを欠かさない。おかげでラッパ吹きは皆長距離走に自信がある。もう少し理性的に考える年代になると、大方は唇周囲のことを気にし始める。なにしろ、同じ練習をしても、演奏可能な音域が奏者によってぜんぜん違うのだ。ちなみに、ラッパ吹きの多くは音楽性に長けていないので、その優劣はどちらがより高い音を出せるかで決まる。高校野球の応援では1塁側と3塁側でハイノートを競うのが通例であった。話を戻すと、大抵の奏者が気にするのが、歯並び、唇の形と強さ、マウスピースをあてる位置と角度である。様々な理論があって、それを専門にする歯医者さんもある。息の通りを良くするために前歯の間を削る奏者もいる。鉛筆をくわえて上下させ、唇の筋肉を鍛えるという人前ではできない練習法も存在する。結局は呼吸法という気がするが、このあたり体系化されていないので、工学的な視点で考えれば新しい学問分野ができるかもしれない。

ラッパ吹きをとりまく環境はあまりよくない。大抵はブラスバンドでラッパを始め、その後オーケストラに移る。大雑把に言うと、ブラスバンドではラッパとクラリネット、オーケストラではバイオリンがメロディーを担当する。要するに、オケで必要なラッパはブラバンより少なく、ラッパ吹きの多くは居場所を失う。初めてオケの楽譜を手にとると唖然とする。100小節の休みはざらで、中にはTACET（出番なしの意）と書かれていることさえある。筆者は高校のオケで指揮者を務めた（写真1）。今考えると出番のないラッパ吹きに与えられたガス抜きであった。たまにしか出

てこないラッパだが、吹けば目立つ。Mahlerは目立たないとだめだが、Mozartなら「いたの？」くらいが丁度いい。Mozartの後にコメントが来たらそれはよくない知らせである。ミスれば指摘は免れないので、精神衛生上あまりよくない。練習場所は常に頭痛の種である。練習用ミュート（弱音器）が発売されて、かなり改善されたが、それでも家で吹いているとうるさい以外の感想を聞いたことがない。ジブリの曲を吹くことが増えた。子供からの苦情がやや緩和される。

ラッパは小さくて安いので、集めたくなる。集めると見せたくなる。私のコレクションが写真2である。もう一つあったが子供に貸したら行方不明になった。先日コンチェルトを吹く機会があったので、もう1本買おうとしたところ、我が家の財務省に却下された。結果は芳しくなかったので勢いで買わなくてよかった。写真奥中央が高校時代に購入したもので、先日修理を依頼したところ、ヴィンテージ物と言われ嬉しかった。この型の楽器は今では手に入らないそうである。

字数も足りたところで所属オケの宣伝をさせて頂こうと思い立ったところ、残念ながら発刊日が定期演奏会の後であることに気付いた。現在、大阪ハイドンアンサンブル*というオケに所属していますので、機会があればぜひ足をお運び下さい。

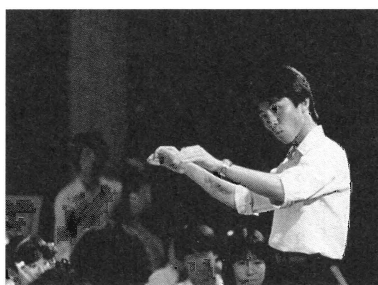


写真1 20 years ago



写真2 My collection of trumpets

*大阪ハイドンアンサンブルホームページ
URL: <http://www.008.upp.so-net.ne.jp/haydn/>

(学界)